

## クロジェクト X～ケニヤン生徒と泣き虫ケニヤイチロー先生

黒明堅一郎

(平成 20 年度 1 次隊 青少年活動 ケニア)

はい、黒明健一朗です。こんにちは、こういう場は苦手なので水を飲ませてください緊張してしまっ。終わる時間が遅くなったので発表時間が短くなると期待していたのですが発表時間は 25 分あるそうなので緊張しています。それでは発表の前にですね、まず 1 番始めにビデオを見ていただこうと思います。

(ビデオ上映)

さっそくパクリから始まっているのですが、それでは発表を始めさせていただきます。まず自己紹介なのですが、本名、黒明健一朗と言います。珍しい名前なのですが年齢は四捨五入をして 30 歳。これは若いと 25 歳、上は 34 歳と幅があるので御想像にお任せします。出身地は倉敷市小島です。家族は妻一人子ども一人、妻はもちろん一人なのですが、2008 年 6 月から青年海外協力隊としてケニアに派遣され 2010 年 3 月まで活動、現在は倉敷市の中学校で働いています。子どもは実はこの 7 月に生まれて無事父親として今活動中なのですが、ここで感じられる方は、「おい黒明さん 3 月まで活動していてどうして 7 月に生まれるんだよ」と、「その子のお父さんは誰だい」と言われるのですがこれはまぎれもなく僕が父親で出してね、9 月 10 月に妻がケニアに遊びに着てですね、いやそういう事はどうでもいいですね、次にいかしてもらいます。

さてケニアと聞いてみなさん思い浮かぶ事はございますか。隣の人と話し合ってみてください。せつかくなので初対面とは思いますが。ケニアと聞いて思い浮かぶ事、何かありますか。それでは一方的な講義形式が私は苦手ですので参加型で行かせてもらおうと思います。何かありますか。

聴講者：槍を持った人が動物と一緒にいる

先生：槍を持った人が動物と一緒にいる。どうぞ

聴講者：ガーナが近くにありそうなイメージ

先生：あ、ガーナが近くにありそうなイメージ、違いますけど。はい

聴講者：マサイ族がいる

先生：よくご存知ですね、マサイ族初めてお聞きになった方おられるかな。どうぞ

聴講者：象とキリンがたくさんいる

先生：象とキリンいいですね、さあ

聴講者：マサイ族

先生：マサイ族

はいありがとうございます。予想通りの答えが来て話しやすくなりました。それでは見ていただきます。さあケニア、サファリの自然と言うことでしてね。ご存知のように動物がものすごくたくさんいます。国立公園という所に入るとですね、もちろん動物はいるんですが国立公園という場所に入らなくても、幹線道路沿いを走っていると横にキリンがいたりですね、シマウマがいたりですねどこに行っても動物が見られます。ラクダの大群がいたりとかですね、すごく自然、動物がいっぱいです。

右側は夕日ですね、日本と比べると大きくてきれいだと思います。次、さきほど言ったマサイ族、原住民マサイ族というのもケニアの代名詞かなと思います。マサイ族、今でこそ商業目的で村とか生活のしかたとかをお金をもらってお見せするというようなマサイ族も増えているのですが、伝統的なマサイ族に関しては成人になったらライオンと戦わないといけないというような話もあって一応ライオンの写真も貼らせてもらっています。

次、あまりご存知ないかもしれないのですが山と海、こちらもきれいです。山、これはキリマンジャロという山を聞いたことありますか、ケニアとタンザニアという国に挟まれたというわけじゃないですけどあります。これは私も実際の登山させてもらったのですが本当に死ぬ思いですね。結局登頂できませんでしたが、きつい登山でした。

右側は魚。海もきれいでですね、モンバサワーンと言った地域ではきれいな沖縄のような海が広がっています。

次にアフリカ特有なのですが右側。海外途上国とかはよくあるのですがスマイル。よく笑ってくれます。僕のしようもないダジャレでもですね、すごく笑ってくれました。今の日本の中学生の子ども達全然笑ってくれません。すごくうれしかったです。

つぎ、スワヒリ語、せっかくなのでここで皆さんと一緒にスワヒリ語勉強して、これだけ覚えておけばケニア人、タンザニア人とは仲良くなれます。それではみなさんいいですか大丈夫ですか、生徒になった気持ちでやっていってくださいね、ジャンボ

聴講者：ジャンボ

先生：いいですね、うちの生徒もそうだったらいいですけどね、カバリアコ

聴講者：カバリアコ

先生：ウズリ

聴講者：ウズリ

先生：アサンテ

聴講者：アサンテ

先生：ありがとうございますという事ですね、これ 4 つさえ覚えておけばだれとでも仲良くなれます。

次、さて私の活動としてクラス、授業、スポーツ、カンパセーション、会話、インタラクティブ、交流というものがございます。私が行った場所はまたあとで説明させていただきます。

のですがゲタヅル更生学校と言ってますね、ストリートチルドレン、孤児、それから犯罪を犯した少年たち、男の子だけなのですが常時 100 人ほどいまして、そこで授業担当の教員として活動しました。色々お話したいのですがかなり多いので絞ってお話させていただきます。

まず英語、私こう見えて実はですね、ぱっと見ですね体育の先生だろとか技術の先生だろとか言われるのですがこう見えて英語なのです。似合わないですよ、こんなごつい男が。次、数学、美術、体育などを教えていました。

さて、その英語の授業で、今までの日本の授業では考えられないような英作文が出てきました。それがこちらです。ちょっと文法的には間違っているのですが子どもの作文をそのまま書いています。”My father tried to kill me.” 「父が私を殺そうとした。」これは英作文ですね。次、“My mother is don't like me,because I am a thief.” 「母は私を好きではない、何故なら私は泥棒だからだ。」というような英作文を書いてきた生徒がいました。

これを見てその子たちを見て「おいなんだこれは」といった時に、なんだか何も話を言いたがらない、なんか悲しそうな眼をして、静かにしていたのを思い出すのですけれども、実はこれゲタヅル更生学校の生徒が実際に体験した事を、その子たちが書いたものです。実際にその子のお父さんが自分を殺そうとした。殴ったりですとかですね。それから実際にその子のお母さんは私のこと好きじゃない。泥棒したからと。泥棒したから好きではないという英作文がありました。というのがすごい印象的で、ちょっとショックでした。

ここで具体例を出しましたので 私がいたゲタヅル更生学校の子ども達についてちょっとお話をさせてください。まず年齢は 10 歳から 18 歳の男の子達です。平均して 100 名ほどがいます。常に毎日 1 人 2 人ケニア全土から更生学校に送られてきます。私どもの更生学校、まあ日本で言う少年院のような所なのですが、3 ヶ月間過ごしたのち色々リスクレベル、危険レベル、学力、年齢、色々な物を判別しまして、次の更生学校、他の 6 か所ある更生学校へ連れて行きます。そこでも 3 年間生活するという、つまり少年院鑑別所のようなところですかね、判定をしてちゃんとした少年院へ連れて行く、更生学校へ連れていくというような受付の機関になります。対象はストリートチルドレン、孤児、非行少年、犯罪を犯した子、窃盗、麻薬、暴力、などした子、一番重いケースの子で殺人、レイプなどがありました。

さてそこで 1 年 9 カ月ほど生活させていただいたんですが、時がたつにつれて子どもたちの問題点をみる事が出来ました。これに気付いたのは大体活動が始まって半年以上先のことですね、それまではずっと苦勞して全然自分の活動うまくいかなかったんですが、問題点を挙げるとしたらこの 4 つの事かなあと思いました。まず、子どもたちは教育を受けることができません。公用語は英語なのですが英語を話せる子というのは本当にわずか、ごく一部でほとんどの子が話せません。スワヒリ語で話をします。もしくはスワヒリ語も

話せず民族語だけで生活する子もいます。

それからルールを守れない、仲間に対して思いやりがありません。ストリートチルドレンというのは本当に自分が食べるために生きていくというような生活習慣があるのでルールなんか守れません。やっぱり何としても食べ物を得ようとする、お金を得ようとするので。

それから仲間に対しての思いやりがないというのは友達よりも自分が優先なので仲間に対しての思いやりがありません。

それから他人を信じることができません。自分の事を表現する事も出来ません。これは自分の事を言う事で弱みに付け入れられてしまうというのが子ども達にはあるようで、自分の事をなかなか言おうとはしません。

さてここでもう一度、問題なのですがこの少年いったい何をしているのでしょうか、ちょっと隣の人と話し合ってみてくださいどうぞ。ヒントは、下の方にあるものが映っているのですが。さらにわかりやすくちょっとこの写真をどうぞ、さて何をしているでしょう、また発表してもらおうと思います。

聴講者：石をチョークにしている

聴講者：石の数で何かを数えている

聴講者：算数の問題を解いている

先生：算数の問題をやっている

聴講者：石をブロックみたいになっている。

先生：

石をブロックみたいになっている、なるほど、いいですね。この子どもはシルベスタという子です。11歳の子なのですがいつも会うたびにこの言葉を言っていました。「モタビ、ナカカキソマ」「先生、勉強したい」っていつも言っていました。実はこれ石をならべて5×5をしています。掛け算の問題ですね。これは別に私が言った事ではありません。勉強したいっていう子ども達、ケニア人だけじゃなくて開発途上国の子ども達、この子たちは勉強の天才だと思います。自分で、言った事を応用してなんとか自分でわかろうとしてやろうとする。生きる力っていうのももちろんありますし、このように勉強をなんとかしようとしています。いつも図書館に来ては本を読みたい本を読みたいと言ってこの子は一生懸命勉強していました。

さて授業だけではなくてスポーツ、サッカー、バレーボール、キャッチボール、レクリエーションなども私の活動の中でしました。レクリエーションと言っても2人3脚や転がしドッジのようなみんなと仲良く輪が広がるような活動です。これは子どもたちが仲間に対して思いやりがないという事なので。

サッカーに関しても子どもたちはパスをしません。仲間を信じませんからパスをしませ

ん。ひどい子に関してはゴールキーパーが自らドリブルをしてですね、相手のゴールに突っ込むんですよ。ほんとにパスしないんです。ですからそういった仲間意識を植え付けたかったというか学んでほしかったというのがあります。

スポーツを通じてルールを守る仲間意識を育てる、安心して楽しめる時間を作る、それから可能性を広げるというのがあります。

ちょっと駆け足ですいませんが、次に行かせて下さい。カンバセーション、会話ですね。実はこれが一番大事にしていた事です。いきなり日本人が来て外国の人にこうせい、ああせいと言われて素直にきけますか。皆さん、おそらく教員の人が多いと思いますが例えばアメリカの教員が来て数学はこう教えた方がいい、スウェーデンの外国の先生が来て理科はこう教えた方がいいんだよってと言われて素直にみなさんは聞けますか、おそらく自分の持ってた知識やテクニックも大事にしなごらある程度は聞きますがやっぱり自分のものも大事ですよ。私も一緒でした。いきなり日本人が来て、「何を言ってるんだ」というような感じでした。なかなか受け入れられません。そこで一番大事にしてたのが会話です。

スワヒリ語もなかなかわからなかった時期に、会話をとりあえずしようと、たくさんの会話をしようという事でさせていただきました。そうするとちょっとずつ地域の人も、子ども達もいろいろ話をしてくれるようになりました。時にはですね、好きな食べ物の話、好きな女の子の話もそうですね、ちょっとエッチな話とかも男の子は好きなのでそういった話もしながら、僕はちょっとぼっちゃり系が好きだみたいな、ケニア人もそういった話をどんどんすると近づいてきます。様々な場所でしました。食堂に入って一緒に料理をしながら会話をしたり、図書館に行って一緒に本を読みながら会話をしたり、それからイベントを通して会話をしました。

左側は七夕ですね。子どもができますようにという一途な思いがかなって無事生まれたのですが、イベントを通して子ども達の短冊も書かせました。その時に子どもたちの願いはやはり更生学校、少年院のようなところへ入ってくる子ども達ですので家に帰りたい、学校に行きたい、家族を大切にしたい、医者になってお金を稼ぎたい等ですね、本当に本音が書けていました。

それから右側はクリスマスのフェイスペインティングですね。クリスマスは一年で一番大きな行事で子どもたちが楽しみにしている日ですね、この時はフェイスペインティングをしたり飾り付けをしたりして楽しむ事が出来ました。

それから文化祭を通して日本人の方にたくさん来ていただいて日本の人と交流してもらおうと、同じように地域のケニアの方も来てもらいました。

カンバセーション、会話の目的はまず一つは他人を信じる心をはぐくむ、信頼関係を築く、子どもたちの不安を取り除くというのがあります。

次に日本文化の体験交流という事で音楽、折り紙、踊りなどをしました。それから日本

との国際交流で日本の学校や地域と手紙の交換をしました。日本文化の体験交流はゲタヅル文化祭という事で、大使館からお手伝いをしてもらって日本の映画を見せたりとか、日清食品、チキンラーメンさんの協力を得て、チキンラーメンを食べさせたりとかしました。折り紙、万華鏡遊びも一緒ですね。日本の映画、日本語、日本の歌、ムービー参照とあるのですが今回これは割愛させていただきます。

日本との国際交流は以下のような学校、岡山県の学校が多いのですが、させていただきました。さてこの交流なのですが自分はただつなげられればいいなと思ったのですが実はケニアの子ども、日本の子どもにとって私が考えてもない良い発展がみられました。ちょっとこれはお聞きする時間がないのでいかせてもらいますね。

交流を通して学んだこと。子どもたちが手紙を書く事で自分の本音をいきなり書くようになりました。今まで当人が何を聞いても自分の過去や、自分の犯罪歴を全然話さなかった子が全く知らない日本の子ども達には色々書くんですね。「実は僕はお金がなくてパンを盗んでこの学校へ来ました。でもこの学校で何とか頑張って次のステップにしたいです」とかですね。今まで僕にも言った事がないような事を平気で書くんです。それから英語で自己表現、あと手紙があります。人から物をもらった事がないので、もらって喜んだというのがあります、手紙をね。

2年間活動を通して、勉強の大切さ、楽しさ、仲間意識、チームワーク、ルールを守る、他人を信じる事、自分を伝える事っていうのを伝える事が出来たかなあと思います。

さて今後の自分達ができる事としてカンバセーション、会話、インタラクションの機会を多くする事、会話、交流ですね、それから長期的展望で子どもたちを見守る事、子どもっていきなりは変わりません。だからやっぱり長期的にゆっくり子どもたちを見守ることが大事なんじゃないかなあと思いました。それでは最後なのですがちょっとムービーがいくつかありますので、このゲタヅルの様子を見てもらいます。

(ムービー上映)

御清聴ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：すごく感動しました。素晴らしいなと思いました。この素晴らしい経験を今の現在校においてどのように還元していますか。

先生：正直ここだけの話なんですけど全然還元ででていません。英語の授業でちょっと話したり、写真を見せたり、ムービーを見せたりしますがこれといった活動というのはできていません。最初の半年間は日本の現場に慣れるのが精一杯、国際理解の活動をしようというのが出来ないくらい、日本のペースに合わせるのが大変なのでちょっとづつやろうと思うのですが、今のようなムービーを見せたりというくらいしかできていません。本当は色々したいのですが、ケニア人を呼んで交流したり、国際理解通信とかでやりたいんで

すけどできてないです。なのでそれが今後の課題だなあとと思います。地域ではいろいろ講演会などさせてもらってますが、学校ではなかなかできていません。すみません期待通りのお答えができなくて。

質問：すごく感動しました。ありがとうございます。いいもの見せられちゃって、自分も来年行くんですが逆にすごい不安が大きくなってきちゃった面もあって、お話の中で会話をする重要性を語られていたのですが、逆にすごく悩まれたり苦勞されたことはどんな事があるのでしょうか。

先生：ありがとうございます。今日は25分で短い時間だったので全然説明できない事もあったのですが苦勞もたくさんあって、最初の3か月で授業担当4人いた教員が、ケニア人3人とボランティア僕1人だったんですが、その3人がいきなりいなくなったんですよ。小学校に転勤になったり他の仕事ができ、だからボランティア1人だけで授業をやらなといけないといった時に、自分ひとりでできる事って限られるのすごく葛藤があって、僕がメインでやってケニア人が全然働かなくていいのかとかですね、行ったらわかるんですけど途上国ならではのトラブルに悩みました。いきなり教員がいなくなるとか、いきなりマネージャー、所属長、校長先生みたいな人が「もうお前授業やらなくていいよ」って急に言うんですね。日本人が授業教えるのはおかしいだと急に言い始めてですね、正直本当に帰ろうかと思ったことも何回もあります。もう布団の中にもぐって泣きじゃくる日々もありました。でもみなさん苦勞はあるので苦勞も糧としてやってもらえばいいかと思えます。こういう苦勞は見えないですけどすごくあります。

あと1分ほどいいですか。最後に子ども達のそのあとをゲタズル更生学校の後の様子です

(ムービー上映)

このように子どもたちは次の更生学校に行って色々職場訓練したり勉強したりして次に向かって行っているんですが、結局100人に5人くらいしか正当な道には行きません。また犯罪の道に行ってしまう。そこが一番の苦勞というかつらかった点です。自分が教えても一生懸命やっても結局は犯罪の道に戻ってしまうというのが一番つらかった事です。